

## 米子水鳥公園と韓国との水鳥湿地交流 2003

神谷要

(財) 中海水鳥国際交流基金財団, 683-0855 米子市彦名新田665

### はじめに

米子水鳥公園を管理する中海水鳥国際交流基金財団は、野鳥に関する国際交流の推進を目指して1995年に鳥取県米子市に設立された財団である。

今回、米子水鳥公園が参加している「東アジアガンカモネットワーク」(神谷2000)の第四回会合(10月29日～31日)と「東アジア・シベリア地域ガンカモシンポジウム2003(11月1日～3日)」が、韓国の西海岸にあるソサン(瑞山)市で開催された。この会議では、東アジアにおけるガンカモ類の保全についての話し合いがなされ、トモエガモやサカツラガンについては特に保全のための活動計画を立案された。また、同時に開催されたシンポジウムでは、東アジアの鳥を取り巻く環境について多くの報告がなされた。この会議では、ガンカモネットワークに加盟している6カ国の代表者だけでなく、各サイトや、種群ごとのワーキンググループの代表者らが参加し、ガンカモ類についての重要な会議であった。筆者は、このシンポジウムで米子水鳥公園での活動を報告(Kamiya 2003)し、各国との情報交換ネットワーク作りに努めた。

また今回は、米子市内で水鳥の保全活動に取り組む市民グループに海外での保全の様子を見学する機会を作り、韓国側との市民交流の機会を創造した。その一つは、11月1日～3日までの三連休を利用した韓国西海岸のソサン市のチョンス湾とのネットワーク間の交流をめざした訪問である。これは、チョンス湾のあるソサン市が実施した「トモエガモフェスティバル2003」に参加し、韓国での水鳥保全活動など勉強するものである。

もう一つは、11月4日～7日の間に米子市の姉妹校流都市である東海岸にあるソクチョ市を表敬訪問し、野鳥保全の意識啓発のきっかけづくりと、水鳥の飛来状況の調査を行った。

### チョンス湾(浅水湾)

今回の東アジア・シベリア地域ガンカモシンポジウムの開催されたソサン市の南方に広がる内湾である。二つの入り江の干潟を干拓してつくられた水田と調整池には、多くの水鳥が生息している。この干拓地は、現代(ヒュンデグループ)の管理の

土地であるが、トモエガモの渡りの中継地として有名で、10万羽から30万羽が一群として飛来し、飛びまわる様子はまるで魚の大群のようで壮観である。

ここには、トモエガモのほかにも、5万羽のヒシクイ、サカツラガン、ハクガン、ツクシガモ、マナヅル、ヘラサギ、コウノトリなどの希少な鳥類も飛来する場所である。

これは、チョンス湾には干拓によってできた広大な水田の餌場と、残された調整池の塘があって、ガンカモ類にとってきわめて良好な生息環境が形成されていたためである。そのため、トモエガモをはじめ、数万羽のヒシクイや、ヘラサギ、ツクシガモ、ナベヅルが多く飛来し、場合によっては、全日本の飛来数より多く飛来している鳥種もいる。

### ソサン市チョンス湾での交流

今回の訪問では、韓国のエコテック研究所が主催となって、ハンソン大学で「東アジア・シベリア地域ガンカモ類シンポジウム2003」が行われた。ここでは、韓国の鳥学会の定例報告会も同時に開催され、多くの韓国人の鳥類研究者と交流することが出来た。とくにプサン大学大学院生のリ・チャンウ氏に出会い、ハクチョウを研究テーマとして今後の研究で交流を持っていくことになった。彼は2003年12月には、わざわざ鳥取県米子市で開催された「ラムサールシンポジウム」に参加してくれた。



図1. 今回交流を行った訪問地の位置図。

また、今回のシンポジウムでは、ロシア・韓国・中国・タイ・フィリピンなどの研究者と交流を持つことができ、このうち中国のリジュワン氏は、レナデルタで標識されたコハクチョウが確認されたポーヤン湖の研究者で、中国での鳥類標識調査の中心人物であり、「米子はいい施設があることで有名だね」とうれしいコメントをいただいた。

米子と韓国の保護団体との交流では、韓国チョンス湾の地元自然保護団体の案内によって、チョンス湾を視察する事ができた。このとき、韓国での保護の現状についての情報交換を多くすることができ、とくに印象的だったのは、広大な冬期湛水水田(神谷 2000)で、100ヘクタールあまりの水田に水が張られており、ここに数万羽



図2. シンポジウムの会場となったハンソン大学.ロシア科学アカデミーのエゲフニー・シロエチコフスキーJr.博士と再会.

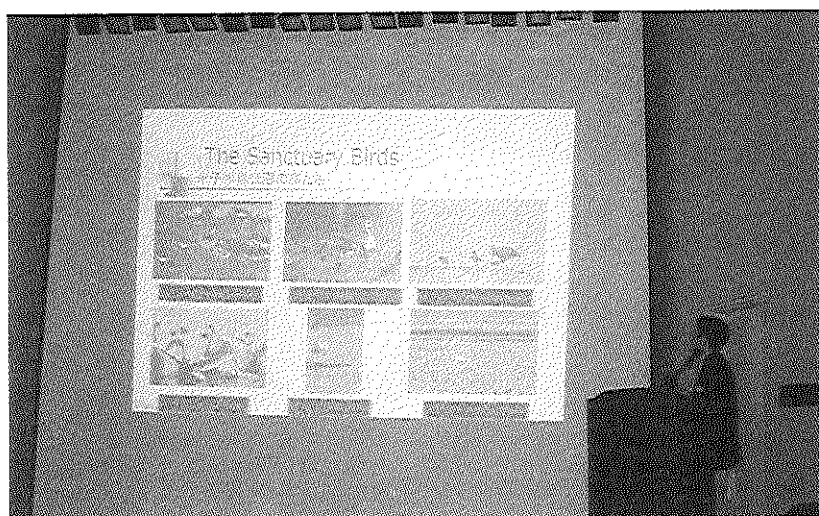


図3. 東アジア・シベリア地域ガンカモシンポジウム2003での発表の様子.

のガンカモ類(ヒシクイ・マガモ・オナガガモなど)が集まっていることであった。また、干拓地内では一部の水田では出来上がった米を収穫せずに鳥に食べさせていた。

ソサン市では、このような取り組みをアピールするために、大規模なトモエガモフェスティバル(展覧会)を毎年行っており、飛来地の保全と環境保護への取り組みへの協力を一般市民へ訴えていた。このフェスティバルでは、鳥類の映像や展示のほか、干拓地で収穫された米をガン米と称してブランド米として販売していた。また、普段立ち入り禁止の干拓地内に鳥を見に行くバスツアーも実施していた。

#### クムサン(郡山)の河口域

この地域は、2003年2月に事前調査で交流を行ったときに尋ねたエリアである。こ



図4. ソサン市での冬期湛水水田に舞い降りた多数のガンカモ類.



図5. トモエガモフェスティバル2003の展示テントに多く見学者が訪れていた.

の場所はクムガン(錦江)河口堰によって仕切られたエリアで、30万羽のトモエガモや数万羽のガン類(オオヒシクイ)・カモ類などが飛来していた。現在、クムサン市では、野鳥展望タワーが建設されており、野鳥学習の拠点となっている。このタワーは、90億円をかけて建設され、野鳥に関する展示は、博物館並みの高度なものであった。しかし、この地域は更なる干潟の干拓を行っており、これによってミヤコドリの繁殖地が失われる可能性が高いそうである。2004年度には、韓国の鳥学会がクムサンで行われたそうである。

### チョルウォン(鉄原)

江原道の西北端に位置するチョルウォンは、鉄の三角地帯と呼ばれ、朝鮮戦争の激戦地の一つである。ここでは、休戦ラインである非武装地帯の南側4kmを一般市民の出入り制限地区(DDZ)としており、住民の居留を許していない。住民は、昼間



図6. 干拓地で栽培されたお米を「雁米」として販売していた。



図7. チョンス湾で見られたトモエガモの群れ、約10万羽。

のみここで農耕を行い、夜にはこのエリアからでなければならない。そのため、広大な水田が広がるこの地域は、農繁期終了後は、多くの渡り鳥の生息地となっている。とくにここで多く観察されるのは、日本に渡っていくナベヅルやマナヅルである。これらは、誰も入ることのできない休戦ラインの中を埒とし、南側の水田を餌場として生活している。また、他にも多くのガン類も生息しており10万羽のガン類



図8. クムサンの野鳥観察タワー。博物館やギャラリー、レストランまで備えている。



図9. チョルウォンのアイスクリームヒルから望む風景。子供たちが見学に来ていた。地平線は、北朝鮮領。

が、これも休戦ラインに食い込んだ溜池で埒を取り、韓国側で採食していた。なぜ鳥たちが、南側で採食し北へ行かないのかはわからないということであった。

このチョルウォンの様子は朝鮮戦争の激戦地であるアイスクリーム・ヒルに登るとよくわかる。水田の全体の様子や北朝鮮の山々まで観察できた。この場所に、韓国・アメリカ・中国・ロシアの鳥類研究者が集まり野鳥を観察する様子は、20年前の冷戦時代には考えられなかった状況ではないだろうか？

ここでは、地元の人々への環境教育も盛んで、子ども達も野鳥の観察に来ていたほか、多くの人々が休日になると野鳥観察にやってくる場所となっている。休戦ラインに設けられた鉄の三角地展望台は、観光地としてお土産点や出店が並び、緊迫感のある衛兵の存在ときわめて好対照な場所であった。



図10. チョルウォンの鉄の三角地展望台。展望台の向こう側が、軍事境界線で、マナズルのねぐらとなっている。



図11. ハンガンのオドウ(鳥頭)統一展望台から北朝鮮側を望む。北朝鮮側では、樹木がまばらである。中央の干潟に数万羽のガンカモ類が飛来している。

### ハンガン(漢江)河口域

ソウルから北へ30km程度進んだ場所で、ソウル市内から流れるハンガンの河口域である。ここは、河口から10kmほど上流に当たるが、干満差による干潟が形成されている。ここも、北朝鮮との休戦エリアとなっており、フェンスで覆われた干潟は、当然狩猟のために鉄砲を撃つことなどできない。まさに、広大な野鳥のサンクチュアリである。ここには、数万羽のヒシクイ・マガンなどが生息するほか、クロハゲワシやサカツラガン400羽、マナナヅル等が観察できた。

ここには、有名なオドウ(烏頭)統一展望台があり、非常によく北朝鮮を望むことができる。ここから、川の反対側に見える北朝鮮は、灰色のみどりの全くない山並みであり、韓国側のみどりあふれた景色とは対照的であった。恐らく、燃料革命によって薪が必要なくなった韓国側と、いまだに薪(まき)を利用している北朝鮮側の違いであろう。

ハンガン河口域やチョルウォンは、東大の樋口先生の研究でマナヅルの渡りルートとして有名な場所であるが、実際に訪れることができたのは貴重な経験であった。

### 東海岸の水鳥生息湿地

韓国の東岸の鳥類の生息状況については、日本海に面しており干満差が少ないのが特徴で、海岸沿いに最終氷河期(2万年前)以降に形成されたラグーン湿地が多く見られる。少し前までは渡り鳥の大きな渡りルートであったようで、清稜(1952)のハクチョウの項には、豆満江(トオマンガン)河口から朝鮮半島の東側を白鳥が南下していくルートの記載がある。

ところが、近年の干拓・観光化などによりその多くの湖沼は環境の悪化が著しく、鳥の生息数も減少している。今回訪問したソクチョ市のチョンチョホウとヨンナン



図12. ハンガンの干潟を望遠鏡で覗くと、サカツラガン400羽の群れが採食していた。



ホウなどの湖は、干拓による都市化や、湖岸のコンドミニアム乱立する様子が見られた。実際今回の訪問では、何度も二十年遅いというコメントが聞かれた。

この傾向は、干拓水田の造成によってガンカモ類の飛来数が増大している西海岸と比べると特に対照的である。

ただし、この地域では38度線が近いために海岸への出入りがフェンスなどにより制限されており、フェンス越しに見る海岸性の鳥類(シノリガモ・アジサシ類・カモメ類・ミツユビカモメ)の生息状況は良好であった。

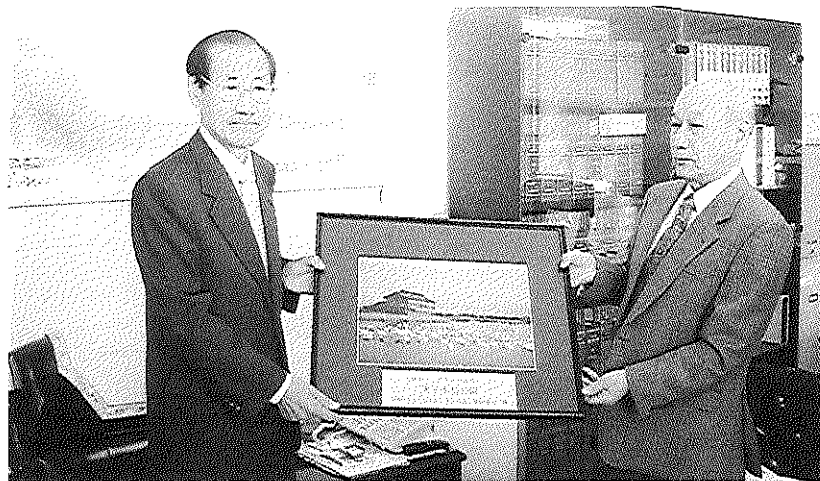


図13. ソクチョ市市長と米子水鳥公園友の会の代表。米子市長からのプレゼントである米子水鳥公園の写真額を手渡した。



図14. ソクチョ市の観光タワーから望むチョンチョホウ湖。湖岸湿地のほとんどが干拓などによって開発されている。隣のヨナンンホウ湖では、コンドミニアムなどが建ち並び観光化されている。

### 姉妹都市との交流

今回は、市長を始め行政関係者との交流を1日目に設定していたのだが、旅行社の手配ミスによって、このスケジュールが大幅に崩れ、十分な関係者との交流も持てなかった。これは、早朝に到着するはずの便が午後に変更になっていた事が原因で、ソクチョ市側に迷惑をかけることとなってしまった。しかし、市長は、翌日にスケジュールをわざわざ空けていただき、米子市長からのプレゼントとしてソクチョ市市長に米子水鳥公園の写真額をわたすことが出来た。ソクチョ市長の寛大さに感謝するばかりであった。

その後、2日目の日程として地元の環境保護団体と市民交流を行った。迎えてくれたのは地元の環境保全連合のソッキョン氏ら2名であった。彼らは、平日である



図15. ソクチョ市の環境保全団体とバードウォッチングを楽しむ米子からの市民団体のメンバー。



図16. 海岸のフェンスの向こうに観察できたシノリガモ。沿岸漁業が盛んな地域でもある。

にもかかわらず、われわれの来訪を歓迎してくれた。ソッキョン氏は、以前には米子にも滞在経験があり、現在も淀江中学校と交流が続いているそうである。今回は、共同して鳥類の生息調査を行ったほか、日本・韓国それぞれの国での環境保全運動のあり方や、米子水鳥公園の活動などの情報交換を市民団体どうしで行ってもらう事ができた。

### おわりに

今回の韓国との交流では、ハクチョウについては1羽のオオハクチョウを観察しただけであった。親しくなったりチャウン氏(プサン大学)によると、韓国に飛来するハクチョウは、ほとんどがオオハクチョウであり、コハクチョウはまれであるということであった。実際、2002年2月にチョンス湾で観察したハクチョウはオオハクチョウであった。このとき感じたのは、韓国の冬は寒く、大寒波の時とはいえ $-20^{\circ}\text{C}$ を下回る気候は、オオハクチョウが多い北海道と共通性を感じた。実際、韓国は北海道と同じ夏緑樹林帯であった。しかし、コハクチョウが通過しないというのも面白いことである。やはり、山陰にやってくるハクチョウは、日本海上に渡りルートがあるのであろう(Kamiya 2002)。

今回の韓国との湿地交流については、米子水鳥公園で2003年の12月21日に報告会を行った。韓国の水鳥の生息地の現状について3名が講演を行い、広く一般の人々に現状を報告することができたと思う。その他にも、米子市内の尚徳小学校で、国語の教科書に出ている「渡りを調べる」という教材に関して、「38度線の現状と野鳥保護」について子どもたちに紹介する機会を得ることもできた。

最後に、今回の訪問は、日本と韓国の市民団体の交流のきっかけとなり、韓国のソクチョ市の環境保全連合に米子水鳥公園友の会よりフィールドスコープの寄贈・野鳥図鑑の寄贈が行われた。今回の交流がきっかけとなり、今後とも両団体・両国の交流がさらに進むことを期待する。

### 備考

「東アジアガンカモ類重要生息地ネットワーク」とは、東アジア6ヵ国26サイトが加盟する国際的な湿地保全のためのネットワーク。1999年のコスタリカのラムサール会議で発足した。ラムサール条約の中での勧告に従い進められている。韓国では、まだソサン市のチョンス湾しか加盟していない。加盟には、水鳥の飛来状況など基準がある。

### 引用文献

- Kamiya, K. and Ozaki, K. 2002. Satellite Tracking of Bewick's Swan Migration from Lake Nakaumi, Japan. Waterbirds (Special Publication 1), 25:128-131.
- Kamiya, K. 2003. The Lake Nakaumi Reclamation Plan and Yonago Waterbirds Sanctuary, in Japan. 2003 International Anatidae Symposium in East Asia & Region :

102-108.

清棲幸保. 1952. 日本鳥類大図鑑II. 講談社, 東京.

神谷要 2000. 東アジア地域ガンカモ類重要生息地ネットワーク. 日本の白鳥 (23・24):33-34.